

たどって、関わる

盛岡商業高等学校 三年 畠山 琴奈

人生というものは、よく道にたとえられている。この「道」という解釈がまず人それぞれだが、私は、人生という道のりというものは、だれかの道をたどっていくことだと考えている。

どうしてそう思うのか言うと、完全に人と被ることの無い人生など無いからだ。この世界に私という人間はたった一人だ。これは何があってもゆるがない事実である。だが、生き方というものは、絶対にその人間のオリジナルにはならないと私は思う。自分が生まれる前に人が何人産まれてきたのか、具体的な数は分からないが、限りなく膨大な数であることは分かる。それだけの人生の先輩が居て、完全に被らない生き方をしている自信が私には無い。人生という道が本当に一人一人にあるのなら、今の時代にはもうすでに道が無い場所など見つからないくらいにさまざまな方向で並び、重なっている様なものだ。そしてその上に私達は立っている。

たしかに、人間の数だけ人生はある。自分で道を切り開くという考えも分かる。自分の足跡が、自分の生きぬいた結果が道となっていく。未来のことは一つも分からないが、過去を振り返ることはできるのだ。そしてその過去の積み重ねが人生となっていく。だから、道というものは後ろにできるもので、自ら切り開いていくものであるという考え方が生まれる。

しかし、その切り開いた先を見たのははたして自分だけなのだろうか。そもそも、この世の中には多くの先人達によって今日まで形作られてきている。交通ルールに数学の公式、流行りの歌。ジャンルも規模も問わない。それを作った人、利用する人、守ろうとする人がいる。場所も時代も超えて関わって人は生きている。意識しているものもあれば、無意識なものだってある。その関わりというのは、道をたどるといふことなのではないだろうかと思う。

無数のだれかがたどって、通りぬけた道の一部に生きとし生けるものは皆立っている。きっとこのような文章を過去に書いたか、思索した人間もいるだろう。だが、今ここで私が書いたことでその道が塗り変わることは無い。強いて言うなら加わるのだ。そして、加わることでできたのは私が今そこにたどってたどりついたからなのだ。だから私は、人生という道があるとすれば、それはだれかの道をたどることだと思う。だれかの道をたどり、関わりながら、生きたいと思う。

(傍線部分は原文まま)